

帝展の若き道産子  
上野山清貢・加藤顕清・山口蓬春

上野山清貢、加藤顕清、そして山口蓬春。この三人はいずれも北海道ゆかりの道産子たち。それぞれ油彩(上野山)、彫刻(加藤)、日本画(蓬春)の分野で戦前から戦後にかけてすぐれた業績をあげた作家たちです。かれらが注目を浴び、作家としての地歩を固めたのは、いずれも帝展で連続して特選となるという快挙を成し遂げたことによります。帝展(帝国美術院展覧会)とは、文部省美術展覧会の後を受けて1919(大正8)年に誕生した帝国美術院の主催による展覧会。当時は二科会、再興院展といった新しい美術思潮を掲げた展覧会も現れましたが、美術界の中心として機能していたのはこの帝展だったと言ってよいでしょう。事実、北海道からも数多くの作家が帝展に出品を試みていたのです。三人が帝展に出品し始めるのはいずれも上京して美術学校などで美術を学んだ後の大正末から。昭和になってほぼ同時に連続特選となりました。上野山は第7回(昭和元)から8、9回と三回連続。蓬春も7、8回、加藤は第9回(昭和3)から10、11回の三回連続といった具合です。かれらはいずれも30歳代で、



上野山清貢〈室内〉1928年



加藤顕清  
〈コタンのアイヌ〉1941年  
中原悌二郎記念  
旭川市彫刻美術館蔵

これを機に、それぞれの個性を打ち立てていくようになります。奔放で力強いタッチと鮮烈な色彩で、南洋や中国の蘇州に取材した作品を手がけた上野山。西洋のアカデミズムを手本にしなが、堅実な作風で端正な彫刻を生みだすようになった加藤。大和絵など古典を研究し、伝統とモダンな感覚を融合させようとした蓬春。本展では上野山の帝展出品作〈パラダイス〉〈室内〉〈暮色〉といった上野山の代表作をはじめ、〈浄境閑寂〉〈松原図〉



山口蓬春〈松原図〉1932年 北海道立函館美術館蔵

〈暖冬〉など蓬春の初期作品、〈人間〉〈コタンのメノコ〉など加藤の代表作などによって、かれらが帝展を舞台に培った個性を展覧します。三人の活躍は、道展(北海道美術協会)が発足するなどして盛り上がりを見せていた昭和初期の北海道画壇にも大きな刺戟となりました。1931(昭和6)年に在京の有力な北海道作家によって結成され、三人も参加した北海道美術家連盟もその一つ。これら戦前の北海道画壇との交流も紹介します。